

中間。牛頭天皇。号ニ大政所一。進雄尊垂迹。

東間。蛇毒氣神龍王女。今御前也。

この史料を見ると、祇園社の祭神牛頭天王の垂迹はスサノオであると明記され、西間の祭神である婆利女・少将井の垂迹はスサノオの妻クシイナダヒメノミコトであるという。現在、八坂神社の中御前・西御座に鎮座するスサノオとクシイナダヒメは、既に室町後期から祇園社の祭神として見なされていたのである。

また、室町期に編纂されたと思われる『祇園社略記』に、牛頭天王とスサノオの習合に関する記述がある(八坂神社社務所 1994)。

或曰、神家祇園称素盞鳴尊、佛家是為牛頭天王、曆家配之天道神、余解会各家之説。

この記述では素盞鳴尊(スサノオ)が神道の神、牛頭天王が佛家の神、天道神が曆家の神、それぞれ祇園社の祭神と見なしていたことが分かる。

そのほか、『古事記』と『日本書紀』の神話巻で、高天原から追放されたスサノオは直接出雲へ天降るのだが、『日本書紀』第8段第4の一説により、高天原から追放されたスサノオは直接出雲へ降らず、一度新羅の曾尸茂梨(ソシモリ)に立ち寄ったとの記録がある。この曾尸茂梨の場所について、多くの先行研究では現在韓国の春川だと指摘されている。戦前、朝鮮総督府は、そこがスサノオの降臨地であるソシモリであると決め、神社を創建しようとした。終戦によって実現しなかったが、春川をソシモリとし、またそこが祇園社、牛頭天王の故地であるとする説は依然としてあった(真弓 2000)。韓国には江原道春川に牛頭山があり、そこには熱病に効果のある梅檀を産したところからこの山を冠した神や仏が信仰されていたという(真弓 1997)。

このように、『日本書紀』の記述から見て、異国から伝来した牛頭天王が即ち日本の神スサノオであるといわれている。佛家では牛頭天王は神家の垂跡がスサノオ、曆家では天道神であるが、「神家」の史料はこれについてどう記録されているのか。次の節で見てみよう。

②牛頭天王と蘇民将来の習合

次に、『祇園社記』所収の鎌倉期から室町期に成立したと推測される『祇園牛頭天王縁起』⁽⁷⁾の中の牛頭天王と蘇民将来についての記述を見てみよう(神道大系編纂会 1992)。以下鈴木耕太郎が訳した現代文である。

異国に住む牛頭天王が沙竭羅龍王の娘・婆梨采女を妻として娶るため、旅に出る。旅の途中、日が暮れてきたため、長者の巨旦将来に宿を求めたが断られる。一方、貧しい蘇民将来は牛頭天王の宿の求めに応じ、栗柄を敷き、栗飯などで、出来る限りのもてなしをした。無事、龍王の城に到着し、龍王の娘と結婚。八人(柱)の王子を得る。妻や八王子を連れ本国に戻る途中、蘇民将来の家に立ち寄り、巨旦将来を滅ぼす決意を伝える。巨旦将来宅に蘇民将来の娘がいるため、蘇民将来の懇願により「茅の輪」と「蘇民将来

之子孫」と記される札を持たせて、巨旦一族滅亡から逃れるように計らった。一方、巨旦は牛頭天王襲来を予期し、千人の法師による読経で牛頭天王襲来を防ごうとした。牛頭天王の指示により眷属たちが法師たちが張った結界が弱まっている箇所を探し遂に片目の法師が経文の一字を読み落としたことを発見し、そこから牛頭天王及び眷属たちが雪崩れ込み、巨旦一族を滅ぼした。

『祇園牛頭天王縁起』とは、現在の八坂神社の縁起であるが、はっきりした成立経緯は明らかにされていない(斉藤 2007)。現存する『祇園牛頭天王縁起』の最も古い版本では、塙保己一がまとめた『続群書類従』の「神祇部」に収録されている。

③スサノオと武塔天神の習合

また、13 世紀後半に卜部兼方によって編纂された『釈日本紀』巻 7 に引かれる『備後国風土記』逸文にはスサノオに関する記述がある。

「素盞鳴尊_ニ宿於衆神_一」

備後國風土記曰宿於衆神_一」

備後國風土記曰。疫隅國社。昔北海坐志武塔神。南海神之女子_平与波比_尔坐_尔日暮。彼所蘇民將來・二人在_伎。兄蘇民將來甚貧窮。弟將來・富饒。屋舍一百在_伎爰塔神借_ニ宿處_一。惜而不_レ借。兄蘇民將來借奉。即以_ニ栗柄_一爲_レ座。以_ニ栗飯等_一饗奉奉爲爰畢出坐。後_尔經_レ年率_ニ八柱子_一還來_天詔_久。我我_レ奉之爲_レ報。答曰。汝子孫其家_尔在哉_止問給。蘇民將來答申_久。己女子与_ニ斯婦_一侍_止申。即詔_久。以_ニ茅輪_一令_レ着_ニ於腰上_一。隨_レ詔令_レ着。即夜_尔蘇民之女子一人_平置_天。皆悉許呂志保呂保志_コロシホロホシ_天伎。即詔_久。吾者速須佐雄能_{ハヤスサノヲノ}神也。後世_ニ疫氣在者_一。汝蘇民將來之子孫_止云_天。以_ニ茅輪_一着_レ腰。上詔隨詔令着即夜在人者將_レ免_止詔_伎。

先師申云。此則祇園社本縁也。

大仰云。祇園社三所者。何神哉。先師申云。如此国記者。武塔天神者素盞鳴尊。少将井者号本御前。奇稻田姫輿。南海神之女子今御前輿。重問云。祇園号異国神不然輿。先師申云。素盞鳴尊初到新羅帰日本之趣。見当記。就之有異国神之説輿。祇園為行疫神也。云々。素盞鳴尊。亦名速素盞鳴尊。神素盞鳴尊之由見之紀。仰而可取信者也。御霊会之時。於四条京極奉備栗御飯之由伝承。是蘇民将来之因縁也。又祇園神殿下有_下通_ニ龍宮_一穴_上之由。古来申伝之。北海神通_ニ南海神女子_一之儀符合輿。

鈴木耕太郎の『備後国風土記』の現代日本語の訳文に参照しながら、次の分析を行う(鈴木 2010)。

I、備後国風土記の記述について

(備後国風土記における疫隅国社について) 昔、北海にいらっしゃった武塔神が南海にいる女子を妻に娶ろうと旅たった。しかし、日が暮れてしまったので、蘇民将来という 2 人の兄弟に宿を借りることにした。初めて、大変裕福な弟の将来の家を訪れた。し

かし、弟将来は武塔神に宿を貸さなかった。次に貧しい兄、蘇民将来の元へ訪れた。この兄は、貧しいながら粟柄を敷き、粟飯などでもてなした。その後数年を経て、武塔神は八柱の御子を連れて兄蘇民将来の元へ、再度訪れ、蘇民将来に対して恩に報いたい旨を伝え、また彼に子孫はいるかと尋ねた。そこで蘇民将来は、娘が妻といると答えたところ、腰の上に茅の輪をつけさせよ、と命じた。そこで蘇民将来は、娘に茅の輪を付けさせたところ、その夜になり、武塔神と八柱の御子が、蘇民将来の娘だけを残し悉く滅ぼしてしまった。武塔神は、「私は速須佐能雄神である、後世に疫病が広まった時、お前(蘇民将来の娘)は、『蘇民将来の子孫なり』といって、茅の輪を腰に付けたならば、その疫病から逃れられるだろう。」と語った。

II、大殿(前関白・一条実経)と先師(兼文)間での問答について(「先師申云〜儀符合興。」)

先師は「これこそ祇園社の本縁である」と申された。大殿(一条実経)は、「祇園社の三神はどのような神であるのか」とお尋ねになられた。先師は「この風土記の記述の通りだと申し上げた。即ち、武塔天神は素戔鳴尊(スサノヲ)であり、少将井は本御前であり、奇稻田姫(タシナダヒメ)のことかと思われ、南海の子女は今御前ではないか」と。大殿は重ねて、「祇園の神は異国の神ではないのか」とお尋ねになられた。先師は、「スサノヲは初めて新羅国に到りその後日本へ帰られたという記述が見られるため、異国の神であるという説が生じたのではないかと申し上げた。そして、「祇園の神は行疫神と為られ、武塔天神の御名は広く世に知られているが、これは速須佐雄能神(スサノヲ)である」などと申し上げた。さらに先師は、「素戔鳴尊または速須佐雄能神、神素戔鳴の由来はこの紀(日本書紀)に見られる。御霊会の時、四条京極にて粟飯を奉じる伝承は、蘇民将来の因縁であると申された。また、祇園社の神殿の下には龍宮に続く穴があると古来より伝えられてきた、これは北海神が南海神の女子の元へと赴く、という点に附合するのではないかと申された。

史料『備後国風土記』逸文において武塔神と蘇民将来の説話が記し、疫隅国社祭神の武塔天神は即ちスサノオであり、疫病をもたらすと同時に疫病を退散する機能を持つ、また蘇民将来と習合していたと考えられている。疫隅国社は現存していないが、西田長男の論述により、疫隅の字から考えても江熊天王社(旧県社素戔鳴神社、現在の広島県福山市新市町)がそれに該当すると考えられる(西田 1984)。また、この記事では祇園社の祭神の三神を述べ、武塔神は即ちスサノオ、少将井は本御前であり、奇稻田姫は南海の女子である。また、スサノオは新羅を経由して日本に帰り、行疫神として武塔天神と習合し、広く世に知られていると記した。『備後国風土記』逸文から見れば、武塔天神は少なからず中世からスサノオと習合し、祇園社の祭神になり、行疫神として広く信仰されていたことが分かる。

④牛頭天王と武塔天神の習合

牛頭天王はまた道教と関わりが深い武塔天神と習合した記録がある。この武塔天神は、鎌倉時代の『釈日本紀』所引の『備後国風土記』逸文中にもスサノオの別名と記され登場

している。武塔天神について松前健は『神社とその伝承』所収「祇園牛頭天王社の創建と天王信仰の源流」において「牛頭天王と武塔神は、はたして最初から同じ神の別名であったかどうか問題であろうが、両者共おそらく類似した内性・機能を持つ荒ぶる神であり、民間に広く信仰されていた神なのであろう。それゆえにスサノオと同一視されたのであろう」と述べている(松前 1997)。

また、『伊呂波字類抄』の「祇園」の記事に牛頭天王と武塔天神の記述がある(橋 1977)。

「祇園」

延久二年^{庚戌}十月十四日。焼亡但天神御躰奉扶出事別當安譽焦全焰翌日入滅世人以為神罰四年三月廿六日始有後三条院行幸牛頭天王因縁自天竺北方有国其名曰九相其中有国名曰吉祥其国中有城其城有王牛頭天皇又名曰武答天神云云其父名曰東王父天母名曰西王母天是二人中所^レ生王子名曰二武答天神此神王沙渴羅龍王女名曰薩迦随此為后生八王子從神八万四千六百五十四神也

為利所生之誕生云云昔常住寺十禪師円有託宣貞觀十八年奉移八坂郷樹下其後昭宣公盛威驗懷蓮臺數字建立精舍官符文。

『伊呂波字類抄』において、牛頭天王と蘇民将来説話の登場人物である武塔天神が、初めて習合している記述があり、少なくとも12世紀の中頃には、牛頭天王と武塔天神が習合していたと考えることができる。また、『備後国風土記』逸文の中でスサノオが武塔神と習合していることが確認できるが、『伊呂波字類抄』では、スサノオは登場していない。つまり、『備後国風土記』逸文が編成される正安3(1301)年に、武塔天神はスサノオと習合していたことが考えられ、『伊呂波字類抄』が編成される12世紀の中頃に、牛頭天王と武塔神が習合していたことが考えられる。

以上の文献に対する分析から、少なくとも鎌倉時代から祇園社の祭神である牛頭天王は垂跡が日本神道の神スサノオになり、疫神また除疫神として広く信仰されていたことが分かる。また、牛頭天王は道教と関わり深い武塔天神、蘇民将来と習合し、これらの神はすべて祇園社の祭神になった。スサノオは、祇園社の祭神である牛頭天王との習合により、日本の土着の疫病神として信仰されるようになった。

⑤近世の神道復古

近世に入って、神道復古思想の潮流により、神仏習合を否定する学者が現れた。特に、祇園社の祭神に対する討論が再燃した。まず、尾張国(愛知県)の津島社の例から、同社に残されている嘉元3(1305)年頃成立の『牛頭天王縁起』では、牛頭天王は薬師如来の垂迹であると記されているが、スサノオにはまったく及されていない。また、近世では、津島社の由緒について触れた、享保7(1722)年の『津島造営助力勸進記』、延享元(1744)年の『津島天王御葦記』、寛政5(1793)年の『牛頭天王鎮縁略記』のいずれの史料にも祭神はスサノオであると主張されている(神道大系編纂会 1984)。

また、松本久史は「スサノオ信仰の歴史」で、近世に神道復古思想の影響で、牛頭天王とスサノオの習合を否定する学説をまとめた(松本 2004)。松本は、近世後期の国学者平

田篤胤は『牛頭天王暦神弁』で、牛頭天王とスサノオの習合を造作であるとし、スサノオが祇園社創建当初の祭神であると主張した。さらに幕末の文久3(1863)年、平田篤胤の門人である松浦道輔は『感神院牛頭天王考』で、同じくスサノオが祇園社創建当初の祭神であるとし、牛頭天王説を否定するとともに、祇園社創建を天智天皇5(666)年に設定し、それ以前のどの由緒書よりも創建を古く遡るという説を唱えた。

このように、近代に入り幕末における神道復古思想は、スサノオが牛頭天王との習合を否定し、祇園社が創建した際に祭神がスサノオであったと指摘した。近世の神道復古思想は神仏習合を全盤に否定し、独善的排他的な一面を持つと考えられている。

では、神仏判然令の発布によりスサノオはまたどのような変化を生じたのか、次の節で見てみよう。

(2) 近代のスサノオ神話

近代に始めた「国家神道」の時代、日本神話＝『古事記』は天皇制イデオロギーの聖典として、或いは皇国史観の典拠とされる。明治維新直後の明治国家は、「王政復古」の号令に象徴されるように、「古代的」な祭政一致による「神道国強化」の政策を打ち出した。さらに、明治国家は、近世的な封建権力を超えた絶対的な権力の基盤を「天皇」に求めねばならなかった。政治と神話とは分離できないのである。したがって、「古代神話」に基づく「神道」を国民教育の要におくことは、絶対に必要であるようになった(斉藤 2006: 173)。

明治元(1868)年の神仏分離の結果、多くの神社境内から仏教施設が除却され、各社の境内の様子が大きく変化した。慶応4(後に明治元年に改元・1868)年、3月に神祇官事務局により「神仏判然令」が発布された。この発布に基づき、同年6月、京都・東山に位置する祇園感神院、即ち祇園社は、その呼称を八坂神社と改め、その中御座に鎮座する祭神も、古くから信仰されていた牛頭天王ではなく、スサノオとなった。祇園社以外に、中世から牛頭天王を祭神として祭っていた日本全国の祇園系の神社は、祭神がすべてスサノオに変更された。百年も続いていた牛頭天王とスサノオの習合は、公的には終了した。現在のスサノオ奉斎社の社名は、明治初頭の数年間のうちにほぼ確定した⁽⁸⁾。

明治17(1884)年、明治政府により頒布された「神道国教化」政策は、正式的「神道」(天皇の起源神話)を仏教やキリスト教などの「宗教」と区別し、「神道」が国民に信じるか信じないかの「宗教」ではなくなった。また、民衆に「神道国教化」の政策を浸透するため、天皇の起源神話である日本の古代神話を民衆の生活に結び付けるようになった。そのうち、神話を地域の伝統の祭祀儀礼との結び付くは、国家神道を民間信仰に浸透する最も有効なのであろうか。

平安後期に入って祇園社は国の疫病退散儀礼として行われた。近世まで祇園社と呼ばれ、日本全国の各地に分布していた祇園信仰の奉斎社では、明治に入って神社名が八坂神社・津島神社・八雲神社などに変更された。これらの神社の社名が変更されることにより、神社の祭神も牛頭天王からスサノオに変更された。また、これらの神社で行われる祭祀行事の祭神もスサノオに変更された。その中で最も知られているのは現在日本の3大祭りの1

つといわれる「祇園祭」である。京都の祇園祭以外に全国各地に祇園系統の祭祀行事が多く存在する⁽⁹⁾。これらの祇園祭は京都の祇園祭と同じく、明治になり祭神が牛頭天王からスサノオに変更された。

本論の中世の神仏習合に対する分析から、仏教の疫病神である牛頭天王は日本の神道での垂迹がスサノオということが分かった。近代に、明治政府は「国家神道」を成立するため、仏教の影響から抜け出そうとした。そのため、日本の疫病神は仏教との習合から剥がれ、神道の神であるスサノオが正式的に日本の本土の疫病神になって広く信仰されるようになった。

また、明治以後西洋の学問の方法が日本に導入され、スサノオ神話が世界神話の舞台で討論されるようになった。その中で、高山林次郎・高木敏雄・姉崎正治は、スサノオ神話を世界各国の英雄神話と比較し研究を行った。スサノオが自然神としての嵐神なのか、人格神の英雄神なのかをめぐって激しい論争が行われた。このように、古代から伝えられてきた日本神話は、近代に入って改めて取り上げられ研究されるようになった。以上、明治政府が明治維新後国家神道の成立を求めることに対する分析から見て、近代に日本神話が取り上げられ論争の中心になったことも明治政府は国家神道の強調に関係があると考えられる。

(3) 現代のスサノオ神話に由来する疫病退散儀礼

上で述べたように、スサノオは中世に牛頭天王と習合し、祇園社の祭神として祭られるようになった。また、近代に入って神仏判然令の頒布により、スサノオは牛頭天王と分離され、八坂神社の祭神になった。現代では、スサノオを祭ることによって、地域の疫病の退散を願う祭祀儀礼は多く存在している。これらの祭祀儀礼は祇園信仰の1部分でありながら、現代日本人の民間信仰の重要な1部分でもある。筆者はスサノオを祭る祭祀儀礼へのフィールドワークを通して、ある興味深い現象に気づいた。それはいくつかのスサノオを祭る祭祀儀礼が、スサノオ神話を由来にしていることである。また、大林太良が編集した『スサノオ信仰事典』の中でもスサノオ神話に由来する祭祀儀礼を取り上げた。筆者は大林の先行研究のもとに、フィールドワークをした上でスサノオ神話に由来する儀礼をまとめた(表 1-1)。

(表 1-1) 日本全国に分布するスサノオ神話に由来する祭祀儀礼⁽¹⁰⁾

祭祀儀礼	都道府県	日程	願望
ヤサラ	青森県	春の彼岸	無病息災
牛のり・くも舞	秋田県潟上市	7月7日	豊作・豊漁・悪霊退散
馬だし	茨城県行方市	7月18、19日	疫病退散
牛尾の蛇祭り	千葉県	11月15日	五穀豊穡
蛇も蚊も	神奈川県横浜市	6月第1日曜日	疫病退散
大御幣つき	福井県三方上中郡	4月5日	五穀豊穡
ひんここ	岐阜県	4月第2日曜、11月23日	五穀豊穡
やぶねり	三重県津市	7月13日	豊漁、疫病退散
長龍神事	三重県	3月21日	雨乞い、豊作
綱うち	滋賀県大津市	小正月の日	五穀豊穡
綱引神事	大阪府大阪市	1月15日	疫病退散
蛇祭	大阪府	4月第1日曜日	無病息災
お綱祭り	奈良県桜井市	2月11日	五穀豊穡
お乙祭り	和歌山県御坊市	3月10日	厄除け、五穀豊穡
身隠神事	島根県松江市	5月3日	縁結び
小童の祇園祭	広島県甲奴郡	7月第3日曜日	厄除け
綱打ち	奈良県桜井市	1月上旬の日曜日	五穀豊穡

表 1-1 の儀礼は日本全国に現存するスサノオ神話を由来とする祭祀儀礼である。これらの儀礼の願望から見ると、神奈川県横浜市の「蛇も蚊も祭り」、茨城県行方市の「馬出し祭り」、三重県津市の「やぶねり」神事と大阪府大阪市の「綱引き」神事は、疫病退散を願う儀礼である。そのほか、秋田県潟上市の「牛のり・くも舞」神事は豊作・豊漁・悪霊退散を願う儀礼である。千葉県の「牛尾の蛇祭り」及び福井県三方上中郡の「大御幣つき」、岐阜県の「ひんここ」、滋賀県大津市の「綱うち」、奈良県桜井市の「お綱祭り」は五穀豊穡を願う儀礼である。和歌山県御坊市の「お乙祭り」は厄除け・五穀豊穡を願う儀礼である。島根県松江市の「身隠神事」は縁結びを願う神事である。広島県甲奴郡の「小童の祇園祭」は厄除けを願う儀礼である。青森県の「ヤサラ」は無病息災を願う儀礼である。これらの儀礼は一見すべてスサノオ神話に由来とする祭祀儀礼であるが、儀礼の願望が全部同じというわけではないことが分かった。これは現代社会の人々の生活を変化するとともに、儀礼で祈願する利益も変化したのが1つの原因だと考える。

そのほか、これらの儀礼は構造から要素まで類似する部分があり、また各地域の地理環境や地場産業などが異なる状況のため、地域の特殊性も持っている。スサノオ神話でスサノオ・ヤマタノオロチ及び稲田姫子3つの要素が含まれている。そのため、スサノオ神話に由来する疫病退散儀礼の中でも、これらの3つの要素が入っている。では、各地のス

サノオ神話に由来する儀礼の中で、スサノオ・ヤマタノオロチ及び稲田姫子 3 つの要素が、それぞれ何の要素で表わされているかについて見てみよう (表 1-2)。

(表 1-2) スサノオ神話に由来する儀礼の構成要素

注：×儀礼で表現されていない

スサノオ祭祀儀礼	スサノオノミコト	ヤマタノオロチ	稲田姫
ヤサラ	×	×	×
牛のり・くも舞	牛乗り	くも舞人	×
馬だし	御神輿	馬	×
牛尾の蛇祭り	氏子中の童子	萱で作った大蛇	×
蛇も蚊も	×	萱で作った大蛇	×
大御幣つき	×	御幣	×
ひんここ	紙で折った人形	紙で折った人形	×
やぶねり	×	竹と萱で作った蛇	×
長龍神事	赤天狗	雄獅子	×
綱うち	×	萱でつくった蛇	×
綱引神事	×	萱で作った蛇	×
蛇祭	×	藁綱	×
お綱祭り	雄綱	×	雌綱
お乙祭り	×	×	×
身隠神事	×	×	×
小童の祇園祭	×	×	×
綱打ち	×	綱蛇	×

上記の表 1-2 を見ると、スサノオ神話に由来する儀礼の中で、スサノオを象徴する物は、スサノオが儀礼に出ていない場合以外、牛乗り、御神輿、童子、紙人形、人が扮する赤天狗と雄綱がある。そのうち、人間が扮するのが 3 箇所、物で表すのが 3 箇所である。一方、ヤマタノオロチにみたてる要素は、物で表す数が多いが、要素の種類が少ない。これらの要素は、「綱蛇」が圧倒的に多数を占め、ほかに舞人、馬、御幣、紙人形、獅子人形がある。もう 1 つスサノオ神話に由来する儀礼の中で出てくる要素は、日本神話の中でスサノオの妻である稲田姫である。稲田姫は奈良県の「お綱祭り」の以外に、祭礼で登場したことがない。「お綱祭り」の中で、「雄綱」をスサノオに見立てるのに呼応し、稲田姫は「雌綱」で見立てられる。以上の分析から、スサノオ神話に由来する疫病退散儀礼には、主要な要素がスサノオではなく、ヤマタノオロチであるということが分かった。

ヤマタノオロチが儀礼の中で重要な要素を占めることは、スサノオ神話に関連があると考えられる。スサノオの神話の中で、一番重要なシーンであるスサノオがヤマタノオロチを退治する神話では、スサノオは英雄として描かれている。この神話によりスサノオは英雄神としての性格が決定づけられた。では、スサノオ神話と疫病退散儀礼の間はどのように

結び付けられるだろう。儀礼で最も重要な要素であるヤマタノオロチを振り返ってみよう。スサノオ神話に由来する疫病退散儀礼の中で、ヤマタノオロチは疫病の象徴として見なされ、スサノオはヤマタノオロチを退治した神であることから、疫神として信仰されるようになった。このように、スサノオの神話で最も疫病の神の性格に相応しいのはスサノオがヤマタノオロチを退治する神話であると考え。そのため、ヤマタノオロチが儀礼の中で強調されるのは、スサノオの英雄神と疫病神としての神格を際立たせるためだと考える。

以上のように、現代社会におけるスサノオ神話に由来する疫病退散儀礼は存在している。だが、現代に入ったころの日本の歴史から見ると、戦後「国家神道」の解体により、民間神道と結び付ける日本神話は、その基盤が崩壊された。日本の敗戦により日本神話は日本の国民をまどわした悪しき「神道」の根源として徹底的に封印され、排除されていった。日本神話は忌まわしい軍国主義のシンボル化したのである(斉藤 2006: 189)。この歴史背景の下で、日本神話と関連づける要素は排除されるようになった。近代にスサノオ神話を由来とした疫病退散儀礼は、戦後、儀礼の復活とともに、スサノオ神話の要素が排除されたと考える。だが、現代に入ったころに排除された日本神話の要素はなぜ現在、疫病退散儀礼の由来といわれ、再び強調されるようになったのだろうか。また、地域の現代化・都市化により、祭祀儀礼は構造から伝承者の認識まで多くの変化が生じた。これらの変化は儀礼の伝承者にどのような影響を与えているのか。以下、4つの事例を通して分析を展開する。

注

- (1) 本論が表記する「スサノオ神話」はスサノオがヤマタノオロチを退治する神話を特定する。また、スサノオに対する表記は『古事記』では速須佐之男命と記載されるが、『日本書紀』では素戔鳴尊と記される。本論では現在通常のスサノオと表記する。大林太良が編集する『スサノオ信仰事典』を参照する。
- (2) 松平誠の『祭りのゆくえー都市祝祭論』において都市のマツリとの対比に使われた用語。
- (3) 同上においてムラのマツリとの対比に使われた用語。
- (4) スサノオが日本神話の神から疫病神になった過程を考察する先行研究は、大林太良が編集した『スサノオ信仰事典』、また権東祐が著作した『スサノヲの変貌ー古代から中世へ』が参考できる。先行研究の詳細は本章の参考文献に参照する。
- (5) 『古事記』と『日本書紀』の神話巻の総称である。
- (6) 『備後国風土記』逸文では現在散逸であるが、鎌倉時代に成立した『日本書紀』の注釈書、卜部兼方著『釈日本紀』に引用されている『備後国風土記』逸文が唯一に考察できるところである。
- (7) 神道大系神社編十『祇園』の『祇園牛頭天王縁起』は八坂神社社務所編『八坂神社文書 上巻・下巻』(臨川書店 1974)と八坂神社社務所編『八坂神社記録』(臨川書店 1978)を参考し編纂した。
- (8) 現在の日本に分布しているスサノオの奉斎社に関しては、茂木貞純が詳しく論じてい

る。「素盞鳴尊信仰の展開—神社本庁『平成「祭」データ』の分析を中心に—」（『神社本庁教学研究所紀要』通号3号 1988年2月 p31～71）を参照する。

(9) 日本全国各地の祇園祭のまとめに関しては、祇園信仰事典編集部が編集した「全国の祇園祭と蘇民将来信仰」（真弓常忠編『祇園信仰事典』戎光祥 p118～153）を参照する。

(10) (表 1-1) 日本全国に分布するスサノオ神話に由来する祭礼は「全国のスサノオ神伝説と神楽・祭礼」（『スサノオ信仰事典』大林大良編戎光祥出版）と筆者のフィールドワークによるものである。

第1章 祭祀儀礼の変化から見る伝承者の地域アイデンティティ

—神奈川県横浜市鶴見区生麦地区「蛇も蚊も祭り」を事例として—

第1節 問題提起と本章の目的

(1) 問題提起

古い歴史を持つ地域の祭祀儀礼は社会的・時代的背景のもとで常に変化を繰り返しながら、現代へと続いてきた。特に高度経済成長期後、祭祀儀礼の伝承活動を取り巻く環境は大きく変化した。それによって、以前村落社会で伝えられてきた疫病退散儀礼は祭祀組織から祭祀構造まで多くの変化が生じた。だが、これら「目に見える」変化の一方で「目に見えない」変化はどうだろうか。変化した社会環境の中で、祭祀儀礼を担う伝承者は儀礼に対する認識がどのような変化を生じたか。また、現代社会の祭祀儀礼はどのような社会的な役割を持っているだろうか。

本章の考察対象である神奈川県横浜市鶴見区生麦地区の神明（しんめい）神社と道念稲荷（どうねんいなり）神社で行われる「蛇も蚊も祭り」（じゃもかも）は、300年余りの歴史を持っている疫病退散儀礼である。生麦地区では高度経済成長期後、地区行政から地場産業まで多くの変化を生じ、都市化・現代化が始まった。生麦地区が都市化・現代化へ進行するという大きな社会環境の中で、「蛇も蚊も祭り」はどのような変化を生じていたか。また、かつて生麦地区の疫病退散を祈願するために「蛇も蚊も祭り」が行われていたが、現在の「蛇も蚊も祭り」はどのような社会的な役割をもっているか。本章は以上の問題意識を念頭に置きながら次の分析を展開する。

(2) 本章の目的

本章では、神奈川県横浜市鶴見区生麦地区神明神社と道念稲荷神社で行われる「蛇も蚊も祭り」を研究対象とし、現代社会における地域の祭祀儀礼の変化から、伝承者が儀礼に対する認識の変化、及び祭祀儀礼が現代社会における社会的な役割を明らかにしたい。

分析手順としては、まず、現在「蛇も蚊も祭り」の構造に注目しつつ、祭り自体とその伝承活動の現状を整理する。「蛇も蚊も祭り」は現在「生麦蛇も蚊も祭り保存会」と「生麦本宮蛇も蚊も保存会」により神明神社と道念稲荷神社で行われている。筆者は2012年度、2013年度、2014年度の「蛇も蚊も祭り」に行ったフィールドワークを通して、「蛇も蚊も祭り」の構造を考察する。次に、戦後に復活した「蛇も蚊も祭り」の祭祀組織への考察により、祭祀の構造及び儀礼における疫病退散要素の変化を明らかにする。戦後「蛇も蚊も祭り」の変化に関わる文献資料は、残念ながらほとんど残されていない状況である。筆者は2つの保存会の氏子に対する聞き取り調査を通して、戦後の「蛇も蚊も祭り」の変化を考察する。最後に、「生麦蛇も蚊も保存会」と「生麦本宮蛇も蚊も保存会」の会長への聞き取り調査を通して、「蛇も蚊も祭り」の「目に見えない」変化

であり、氏子が儀礼に対する認識の変化を考察する。

このように、「蛇も蚊も祭り」の祭祀組織、構造など「目に見える」変化、及び伝承者が祭りに対する認識の「目に見えない」変化に対する考察から、現代社会における祭祀儀礼が果たしている社会的な役割を明らかにする。

第2節 研究対象の背景

(1) 調査地の背景

まず、「蛇も蚊も祭り」が行われている生麦地区の地理的な背景から見てみよう。

生麦地区は、現在神奈川県横浜市鶴見区に所属し、もと「生麦村」及び「貴志村」と呼ばれていた。今の地区名「生麦」の起源は、徳川家康が江戸入国の時に生麦の街道を開いたことから、その名前が与えられたと伝えられている。また、生麦は海辺に近く、昔、生貝をむく作業をする人が多かったため、「生まき」が転じ「生麦」の地名の由来になったともいわれている。徳川幕府の代官小林籐之助が支配していた万延元（1860）年2月6日に、神奈川奉行の御預り所となったが、明治元（1868）年4月には、神奈川裁判所の管轄に入り、明治11（1878）年1月20日に、鶴見村に合併した。更に同22

（1889）年4月1日、市町村制が実施された際には、生見尾村大字生麦と改められた。大正10（1921）年4月1日に、鶴見町大字生麦となり、昭和2（1927）年4月1日に、横浜市に編入されて、鶴見区生麦町となったのである（横浜市役所 1985）。

交通の面では、京急本線の花月園前駅の生麦駅及びJR東日本鶴見線・国道駅があり、旧国道15号線が通過する。

次に生業についてまとめてみる。生麦の漁業は明治期に入って御菜八ヶ浦の伝統を維持して、東京湾内漁業の中核的存在であった。明治18（1885）年、潮田村、小野新田とともにノリ養殖に進出し、さらに貝類養殖において市域内外で先駆的な業績をあげた。生麦の漁業の発展は徳川家康が天正18（1590）年8月に江戸に入って以後、江戸に人口が増えて大きな消費地となってからのことである。江戸城への御菜御肴を定期的に献上するほか、御用船の曳き船など各種の船役を務める見返りとして、今の東京湾（当時は内海と呼ぶ）の漁猟に特権が認められていた専業漁業村落を御菜八ヶ浦と称していた。

「御菜八ヶ浦」とは金杉、芝、品川、大井御林、羽田、神奈川漁師町、新宿の七浦に生麦浦を加えたものであった（横浜市役所 1985）。

現在では、生麦魚河岸通り・生麦魚介商組合加盟の専門鮮魚店が旧東海道沿いに建ち並ぶ。一般消費者も気軽に利用できる「朝市」は有名だが、小口卸売を専業としている店が5丁目に多く、正午以降はほとんど営業していない。また、住民数が一番多い5丁目は、サービス業に勤める人数も多く、3丁目は旧国道に沿うため、飲食店・宿泊店が圧倒的に多い。下の表2-1が示す生麦地区産業大分類別事業所数と従業者数から見ると、生麦地区の5丁目に卸売・小売業とサービス業が集中していることが分かる（表2-1）。

(表 2-1) 生麦地区産業大分類別事業所数と従業者数 ⁽¹⁾

町名	産業大分類別事業所数 (単位：軒)							従業者数 (単位：人)
	総数	卸売 小売業	サービス業	飲食 店 宿泊 業	建設 業	製造 業	その他	
生麦 1 丁目	74	22	3	11	8	12	18	1, 933
生麦 2 丁目	26	3	11	0	1	5	14	894
生麦 3 丁目	164	37	2	58	21	7	39	983
生麦 4 丁目	84	23	23	8	14	6	27	468
生麦 5 丁目	179	80	80	25	12	7	48	1, 034

人口の面について、平成23(2011)年までの生麦は、表 2-2 が示すように生麦地区の人口総数は 1 丁目1777人、2 丁目17人、3 丁目3739人、4 丁目4207人、5 丁目3496人である。1 丁目は旧国道に沿っており、キリンビール横浜工場がある。3 丁目・4 丁目・5 丁目は住宅地である。2 丁目は鶴見川に隣接していて、物流センターと造船工場が多く設置されているため、住民はわずか17人だけである。また、4 丁目は鶴見川に隣接した住宅地のため、5 つの地域の中で人口が一番多い地区となっている (表2-2)。

(表 2-2) 生麦地区人口と世帯登録者 ⁽²⁾

町名	世帯数	人口			面積 (A)
		総数	男	女	
生麦 1 丁目	1, 135	1, 777	964	813	0. 438
生麦 2 丁目	16	17	15	2	0. 357
生麦 3 丁目	2, 180	3, 739	2, 059	1, 680	0. 181
生麦 4 丁目	2, 204	4, 207	2, 199	2, 008	0. 213
生麦 5 丁目	1, 946	3, 496	1, 858	1, 638	0. 243

そのほか歴史的イベントとして、幕末の文久 2 (1862) 年 8 月21日に発生した「生麦事件」がある。薩摩藩主の父・島津久光の行列に乱入した騎馬のイギリス人を、供回りの藩士が殺傷した事件であった。現在、生麦 4 丁目に「生麦事件発生現場の説明板」があり、事件発生現場であることを物語っている。

(2) 「蛇も蚊も祭り」の背景

「蛇も蚊も祭り」はこのような歴史を持つ地区で発祥した祭りである。江戸時代初期から今に至るまで 300 年の間生麦地区に伝わる民俗行事であり、その由来はスサノオが

ヤマタノオロチを退治する神話であるといわれている。また、別のいい伝えでは「蛇も蚊も祭り」は茅⁽³⁾で作った「蛇」⁽⁴⁾（へびと呼ぶ）に悪霊を封じ込めて海に流したことに始まったとも伝えられている。平成4(1992)年10月1日生麦の原地区と本宮地区に伝わる「蛇も蚊も祭り」が横浜市指定無形民俗文化財に指定された。現在、「蛇も蚊も祭り」は毎年、原地区の神明神社と本宮地区の道念稲荷神社で、原則として6月の第1日曜日に行われている。しかし、以前に比べ現在では茅の育成地が少なく、茅の入手が非常に困難になったため、茅の生育状態により実施日が第2日曜日になることもある。

また、氏子のいい伝えによると、「蛇も蚊も祭り」は明治の半ばころまでは端午の節句に行われていたそうであるが、太陽暦に倣って、6月6日に行われるようになり、さらに戦後ややしばらくして、6月の第1日曜日に行われるようになった。現在日本の祭祀儀礼は、参加者が参加しやすくするために、もともと平日に行っていた儀礼を休日あるいは週末に変更するケースが多く見られる。地域の祭祀儀礼が社会環境に適応しながら変化しつつある1つの面が見えるだろう。

そのほか、「蛇も蚊も祭り」は2つの神社により行われる。それぞれは神明神社と道念稲荷神社である。神明神社は、本社が生麦の杉山神社であり、御祭神が大和武尊である。当社の年間祭祀は、初午祭（2月第1土曜日）、蛇も蚊も祭り（6月第1日曜日）、盆踊り（8月第1月、火曜日）の計3回である⁽⁵⁾。

一方、道念稲荷神社はその由来について『新編武蔵風土記稿』に「往還の中程字元宮にあり。海道より入口に石の鳥居をたつ。是を道念稲荷と云。前に蟠る松あり龍泉寺持なり。社地の入口左の方に石地藏4尺なるを建つ。稲荷神社木村（生麦町）中央にして東海道往還へ接す。宝暦三癸酉二月再建す、とあり現在じゃもかも祭を行っている」と記載されている（間宮 1982）。この記事のとおり、当社からほぼ50メートルのところ龍泉寺があり、本宮町の墓地の1つである。当社の年間祭祀は、正五九祭（正月・5月・9月の21日）、初午祭（2月節分祭の第1日曜日）、蛇も蚊も祭り（6月第1日曜日）の計3回である。その中で、「蛇も蚊も祭り」は最も盛大な祭りである。

第3節 現代社会における「蛇も蚊も祭り」の構造

(1) 準備段階の構造

「蛇も蚊も祭り」の準備活動は主に茅の準備と「蛇」の製作に分けることができる。神明神社では祭りの当日に「蛇も蚊も」を作るため、祭りの準備としては祭り用の茅を収集することだけである。現在、祭りの準備で保存会の氏子が最も困っていることは茅の入手である。江戸時代、河口に位置した生麦には茅が容易に手に入る地があったが、現在では住宅地が増え、野生の茅は次第に減少していき、祭りが必要とする茅を収集することは困難になってきている。

神明神社では、毎年貝ノ浜緑地公園と岸谷小学校の2箇所が生息する野生の茅を利用している。そのほか、茅場で茅を栽培し毎年5月の連休から、保存会の氏子が3箇所の

茅の育成状況を調べに行く。しかし、住宅用地の増加に従って、元々空地に自然に生きる茅の面積が少なくなり、その3箇所の茅だけでは「蛇も蚊も祭」に必要な茅の量が十分ではなくなる傾向が見える。

一方、道念稲荷神社では、生麦運河沿岸の埋め立て公園と大黒町の茅場の茅を使って「蛇」を作る。道念稲荷神社は3頭の「蛇」を編むため、茅の量は最低でも10センチの束で約250束が必要である。近年茅を採取する茅場がなくなり、氏子たちは転々と場所を変えて何とか間に合わせている。現在祭りが利用している生麦運河沿岸の埋め立て公園の茅場は、平成12(2000)年に埋め立て公園が半分完成した際に、保存会が横浜市鶴見区役所に申請届を提出し茅場として確定した場所である。また、平成7(1995)年から9年間、大黒町にあるNKKスイッチズ株式会社が好意で茅を提供していた。平成10(1998)年から現在まで、保存会はNKKスイッチズ株式会社に行き、茅刈りをしている。筆者は祭りの保存会の氏子と一緒に茅刈りに行く途中で、保存会の氏子から茅場を探す苦労を多く聞いた。茅場の減少は祭りの実施に対し次第に深刻な問題になると考える。以下筆者が2013年参加した神明神社と道念稲荷神社の「蛇も蚊も祭り」準備段階の事例を通して、2つの保存会がどのように祭りを準備するのかを見てみよう。

①神明神社準備段階

(表 2-3) 2013年神明神社「蛇も蚊も祭り」の準備表

月日	内容	参加者
4月	茅の生長状況の調査	保存会会長が不定期に視察する
4月末	茅の生長状況の確認	保存会のメンバー
5月中	「道路使用許可申請書」、 「火煙発生届出書」の準備	保存会会長
5月11日	蛇も蚊も打ち合わせ	保存会
5月最終日曜日	茅の刈取り	保存会の方、自治会、ボランティア
6月	小学生に蛇も蚊もの編み方を教える	生麦小学生、保存会

毎年4月から「生麦蛇も蚊も保存会」の氏子は茅場の茅の生長状況を調べ始める(表2-3)。神明神社では岸谷小学校の崖、貝の浜公園の茅場、この2箇所の茅を使用する。長さ1.5メートルの茅は「蛇も蚊も」に最も適しているが、祭りの時間に間に合わない場合にはこれより短い茅も混ぜて利用される。5月の最終の日曜日に保存会の氏子は茅を刈りに行く。近年、茅の減少に従って、茅の入手が困難になり、祭りを順調に進めるために保存会の氏子は祭りが始まる何ヶ月も前に茅場を探し始める。現在決められた茅場は、岸谷小学校の後ろにある崖と貝の浜公園の茅場である。この2箇所の茅はすべて野生の茅で、無料で手に入るが、毎年区役所に茅場の利用申請書を提出しなければなら

ない。

2013年5月25日午前8時に、「生麦蛇も蚊も保存会」の氏子を主な参加者として神明神社に集合し、岸谷小学校へ茅刈りに行った(写真2-8)。岸谷小学校の茅は、校舎後ろにある崖に生えおり、その茅を刈る際には縄を腰に縛って崖に降りて行く。危険を伴う作業に見えるが保存会の氏子は毎年このようにして茅を刈っている。氏子たちは刈取った茅を軽トラックに載せ、神明神社の干し場に一週間干しておく(写真2-5、2-6、2-7)。岸谷小学校での茅刈りは10時半まで行われ、その後に貝の浜公園の茅場へ出発する。以上の2箇所での茅刈りが終わった後、保存会一行の氏子は神明神社に戻る。



(写真 2-1 写真 2-2) : 昭和 48 (1973) 年「蛇も蚊も祭り」の様子
(写真提供者 : 「生麦蛇も蚊も保存会」会長 青木氏)



(写真 2-3、写真 2-4) 貝の浜東緑地公園の茅 (写真提供者 : 青木氏)



(写真 2-5、2-6) 平成2010年 神明神社境内の茅干す場 (写真提供者 : 青木氏)



(写真 2-7) 2011年神明神社の茅干す場
(写真提供者 : 青木氏)

(写真 2-8) 2013年岸谷小学校の茅刈り場
(撮影者 : 近石 哲氏)

②道念稲荷神社準備段階の構造

(表 2-4) 2013年度道念稲荷神社「蛇も蚊も祭り」準備表

月日	内容	集合場所
4月27日	保存会打ち合わせ	東部本宮会館
5月18日	干し場組立	東部本宮会館
5月19日	茅刈り、選別、茅干し	東部本宮会館
5月26日	蛇製作	道念稲荷神社前
6月1日	蛇製作	道念稲荷神社前

2013年度道念稲荷神社「蛇も蚊も祭り」の準備段階は、保存会打ち合わせ、干し場組立、茅刈り、「蛇」作製に分けられる(表2-4)。保存会打ち合わせは東部本宮会館で行われ、保存会の氏子が今年度の「蛇も蚊も祭り」の準備や祭り当日の段取りについて相談する。祭りの準備の担当者は、祭礼主催の総括指揮を担当する祭礼総括責任者、茅刈りに関する指揮を担当する茅刈責任者、及び茅干しに関する指揮を担当する茅干責任者の3人である。

次に2013年度道念稲荷神社「蛇も蚊も祭り」の準備活動を見てみよう。

ア：茅刈り

5月19日、保存会の氏子を中心として、生麦運河の沿岸にある埋め立て公園と大黒町へ茅刈りに行く。当日刈った茅が「蛇」を製作する材料になるため、保存会は皆茅の質と数量に高い関心を持っている。平成23(2011)年以前には、野生の茅がまだ多くあったため、祭りで必要な1束直径7センチの茅250束は、生麦3丁目の茅だけで済ますことができた。しかし、近年野生の茅の数が減っていくに従って、埋め立て公園の茅だけでは蛇を編むのに必要な量に足りない。保存会の会長をはじめ、多くの氏子は蛇を編むための茅場を探していた。結局、2011年初め、茅刈りの場所を生麦3丁目以外にも見つけ、大黒町の茅も刈りに行くようになった。2013年、茅刈りの日、埋め立て公園の茅場から大黒町の茅場に移動中に、遠くから2人の警察と1人の女性職員が保存会の車を止めた。話を聞くと、蛇も蚊も保存会の軽トラックが茅場にある会社の専用駐車場の入り口をふさいでいるとのことであった。保存会の会長は横浜市重要無形文化遺産に登録している「蛇も蚊も祭り」で使用する「蛇」を作るために、こちらに茅を刈りに行ったことを警察と職員に説明し、当日の茅刈りで利用する車はすべて事前に警察局に申請届けを提出してあると説明した。だが、その後、保存会の会長から「毎年そこで茅刈りの時によくその会社から非難されるので、祭りの準備段階で保存会のみんなには不愉快の気持ちをさせた」と話があった。その時再び茅刈りの困難さを深く感じた。

茅の種類は「犬茅」、「本茅」(日本茅)の2種類に分かれているという。「本茅」

は雨漏れを防ぐ性質を持っているので、以前には屋根の材料として広く使われていた。現在「本茅」が使える場所が少なくなったため、わざわざ「本茅」を植える人も少なくなってきた。「本茅」は丈夫で耐水性がよいため、「蛇も蚊も祭り」の「蛇」は必ず「本茅」で作る習慣が今でも残っている。しかし、現在使える「本茅」の量が少なくなっているため、犬茅も混ぜて「蛇」を作るようになった。保存会の人と一緒に茅刈りに行った際に「本茅」と「犬茅」を短時間で区分する方法を教えてもらった。長さ1メートルで幹部が長いほうが「蛇」を作るのと適した「本茅」で、幹部が短く葉っぱが多いほうが「犬茅」と判断してよいという。

茅刈りに行く5月19日、午前9時に保存会の全員が道念稲荷神社の鳥居に集合した。2013年に茅刈り組は26人が参加して、車6台を出した。全員が揃ってから、一緒に車で茅刈り場へ行く。最初に行く茅刈り場が生麦運河の沿岸にある埋め立て公園で、着いたら、茅刈りの責任者高林氏は刈り範囲と注意事項を全員に説明してから、茅刈りの作業が始まった（写真2-9）。それぞれ何人か1組を作って、熟練に鎌を使って茅を刈り、刈った茅を直径7センチぐらいの束にしてプラスチック製の紐で縛って、軽トラックにのせる。2013年には埋め立て公園でほぼ200束を刈った。「蛇」を作製する必要な茅が250束でまだ50束が足りないため、保存会の人たちは埋め立て公園の茅刈り作業が終わってから、また大黒町の茅刈り場へ行った（写真2-10）。

大黒町の茅刈り場は大黒埠頭内にあるため、中に入るには事前に埠頭管理科北部管理事務所に車通行の申請書を提出しなければならない。大黒町の茅刈りは2010年から始まったばかりで、毎年埋め立て公園で刈った茅の量が足りない際に補充の分を刈る。埋め立て公園の茅と比べ、大黒町の茅は「本茅」の量が少なく、そのため「犬茅」も少量刈った。大黒町の茅場は釣りに行く人がよく通う大通りのそばにある細道のため、保存会の人を通る車を避けながら、本茅を探し、刈っていた。当日大黒町で刈った100束の茅と、埋め立て公園で刈った茅を合わせて全部で300束の茅になった。この数は「蛇」の製作に充分提供できる数であったため、大黒町での茅刈りで2013年度の茅刈り作業を終了した。

大黒町での茅刈りが終わってから、参加者は車で東部本宮会館に戻った。刈ったばかりの茅を会館の後ろに事前に用意した干し場で茅を一週間干しておくかびが生えないようにするためである（写真2-11）。干し場はスチールパイプと縄で建てられ、茅束を真ん中から半分にしてスチールパイプの左右にかけて干す。幹部が長い茅で「蛇」の頭を作り、茅場の一番前に置く。短い方で作った「蛇」の胴体は干し場の後ろに置かれる。干し場の作業が終わってから、会館の2階で会員そろって昼食をとる（写真2-12）。昼食は東部本宮町の婦人部が用意して、横浜の名食「崎陽軒」のシュウマイ弁当であった。他に冷やしたビールとお菓子を机につつずつ出した。12時に、本宮蛇も蚊も保存会会長が挨拶してから、食事が始まる。食事の間に、今年の茅の収穫について話し合っ、翌週の蛇編みの段取りも相談していた。1年に1回の町内行事なので、氏子はやる気満々で、これからの祭りを楽しみにしている。

(表 2-5) 道念稻荷神社蛇も蚊も担当表

行事担当役	担当内容
祭礼総括責任者	祭礼主催の総括指揮
茅刈責任者	茅刈りに関する指揮
茅干責任者	茅干しに関する指揮
蛇製作総責任者	製作・資材に関する指揮
蛇頭製作責任者	頭部製作の指揮
胴・組み立て責任者	胴部製作・組み立て・仕上の指揮
蛇耳・舌・仕上げ責任者	耳・舌製作の指揮
神社飾責任者	祭壇・幟など神社飾りの指揮、目・角・髭・剣の製作
参加者召集責任者	祭礼参加者の招集手配
蛇巡行総責任者	各蛇の巡行・調整の総指揮
南行責任者	南行蛇の巡行指揮
北行責任者	北行蛇の巡行指揮
西行責任者	西行蛇の巡行指揮
絡・御練責任者	校庭入場から神社迄の巡行指揮
囃子責任者	囃子の指揮
警備責任者	各蛇巡行警備の指揮及び巡行調整
会計責任者	祭礼会計の責任者
総務責任者	祭礼に関する広報・購入・食事、子供分配金・直会等の手配指揮

イ：「蛇」の製作

「蛇」を作るための材料は茅以外に、芯に使う荒縄、耳と舌を作る菖蒲、目にする貝、角にする枝、剣を作る木材である。祭礼日の1週間前にそれらの材料を担当責任者が取り備えておく。茅刈り1週後の日曜日に、道念稻荷神社の境内で「蛇」の製作が始まる。午前8時に、保存会のメンバーは道念稻荷神社で集合する。そして、茅を準備する班、胴体を作る班、頭を作る班、縄を作る班と頭の細部である舌・角・耳を作る5つの班に分れる。茅を準備するのは8人ぐらいであり、1週間干して乾燥した茅を柔らかくするために、茅束に水をふきかけ、金槌で敲く(写真2-13、2-14)。「蛇」の頭を製作するために必要な縄は、茅を表にして編まれた縄であり、1つの班5人で縄を2メートルごとに作る。「蛇」の頭を製作する作業は一番難しいので、6人で一緒に行く。「蛇」の頭の編み方は「あじろあみ」⁽⁷⁾と呼ばれ、頭を製作する専用の縄を使って、頭の上部に6本の縄で、下部に8本の縄、それぞれ横縦の組み合わせで1頭の「蛇」が完成される(写真2-15、2-16)。頭の細部である「蛇」の舌・角を作る班は2人で行う。「蛇」の

舌は菖蒲で作られる（写真2-19、2-20）。魔よけの効果があるため、昔から「蛇も蚊も祭り」の「蛇」の舌はずっと菖蒲で作製し、今年も同じく菖蒲で作った。しかし、菖蒲は値段が高くて、なかなか入手が困難のため、これから普通の茅で「蛇」の舌を作るように変わる可能性があるとして保存会の氏子の人がいっていた。元々「蛇も蚊も祭り」で魔よけの機能を持っている要素がこれから無く可能性があると考える。舌の製作は菖蒲で横縦の組み合わせにして、最後にラッカーで赤く塗る。

「蛇」の胴体を作る時は、先に9本の縄を3本ずつ先頭の両端にある道具に縛って、道具をぐるぐる回し、縄を絡み合わせる（写真2-23、2-24）。9本の縄を3本の縄に絡み合わせてから、担ぐ人の肩を保護するために縄の上面に茅を縛る。胴体の製作は1日掛かるそうである。

現在「蛇」の胴体を作るに使う道具はかつて漁師氏が網を作る時に使った道具と同じである。今祭りで使う2つの道具は30年前から使っているもので、3年前に1つの道具が壊れたため、新しく作り変えた。昔、本宮の漁師らは同じ道具を使って、漁網を作った。「蛇も蚊も祭り」は元々漁師の生活と密着しているところが分った。漁師の生活に欠かすことのできない網製作の道具が祭りにも使われている。祭祀活動と生産活動が緊密な繋がりを持つところが見えた。

1日の「蛇」を作る作業が終わって、祭りの幟を立てるなど神社を祭りの雰囲気にするような作業が行われる。これで祭りの準備活動が全部終了することになる。道念稲荷神社の「蛇も蚊も祭り」は半日であるが、そのための準備に2週間もかかっている。しかし、毎年1回の行事なので、保存会の氏子も本宮住民も、毎年この時期になると祭りの準備について話したり手伝ったりする姿が見える。



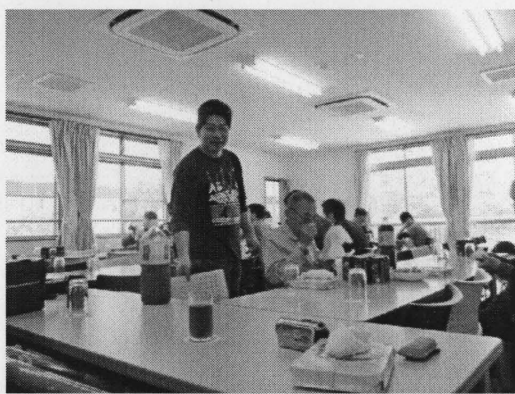
(写真 2-9) 全員に茅刈を説明する⁽⁸⁾



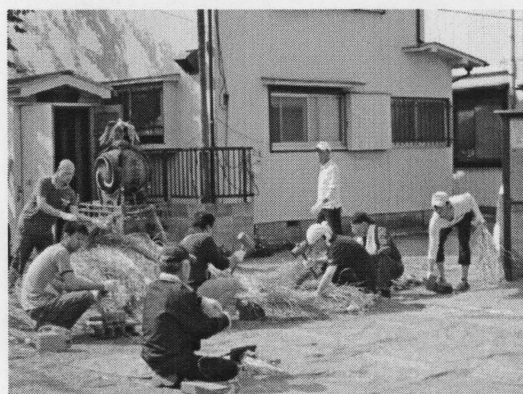
(写真2-10) 埋め立て公園で茅刈りの様子



(写真2-11) 東部本宮会館の後ろにある干し場



(写真2-12) 茅刈り後の懇親会



(写真2-13) 金槌で茅束を敲く



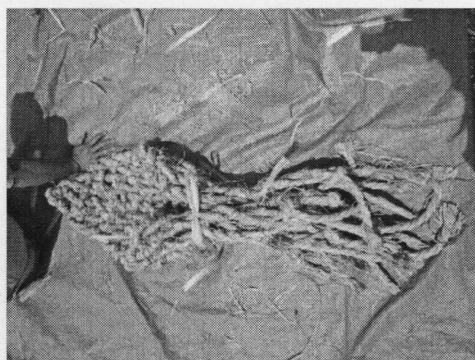
(写真2-14) 茅束に水やり



(写真2-15、写真2-16) 「蛇」の頭作製の縄を作っている



(写真2-17) 「蛇も蚊も」の頭を製作中



(写真2-18) 「蛇も蚊も」の完成した頭



(写真2-19) 「蛇」の舌が作製の菖蒲



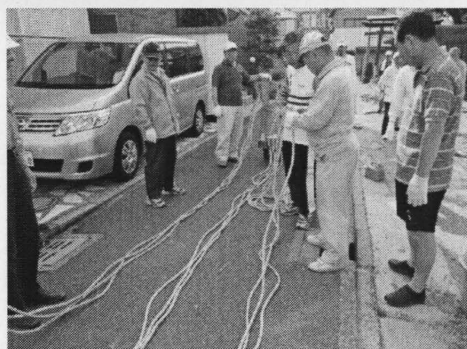
(写真2-20) 菖蒲で「蛇」の舌を製作中



(写真2-21) 「蛇」の目玉



(写真2-22) 完成した「蛇」の舌



(写真2-23、2-24) 縄を3本ずつ縛る

(2) 「蛇も蚊も祭り」の構造

1) 神明神社「蛇も蚊も祭り」の構造

① 祭礼

神明神社は本社が生麦の杉山神社である。「蛇も蚊も祭り」の宮司と神主は、杉山神社の宮司・神主が担当している。神明神社の「蛇も蚊も祭り」は原西町、原東町、柳町、住宅地町、生麦住宅地の5町の氏子が参加する祭りである。

京急線の生麦駅で降り、歩いて10分ほど進むと祭りの本場である生麦神明公園に着く。神明公園の中に、石で作られた蛇の形の彫塑があり、その模様は現実の蛇形とはやや違っている。真ん中には砂場があるので、辺りの子供たちは常に彫塑を囲むように砂場で遊ぶ。神明神社は神明公園の後ろにある。朝6時半から氏子が2頭の「蛇も蚊も」を作り始める。「蛇も蚊も」を作るには先ず6本の縄の端を社殿前の柱に縛って、氏子が鳥居に立てその縄の端を持つ。その後、縄をまっすぐ引き伸ばし、4人1組のグループで「蛇も蚊も」の胴を編む。先に「蛇も蚊も」の頭から編み始めるが、1頭の「蛇も蚊も」を作ることは最低3人が必要とし、1人が茅の調整をし、もう1人が縄6本を手にとって、後の1人が「蛇も蚊も」を編む。このように、1つの組が作業している間に、もう1つの組が休憩に入るなどして交代で回す。

「蛇も蚊も」の胴を作り上げるのに約4時間かかる。胴を作り終わると、頭の方を作り始める。「蛇も蚊も」の頭は縄に茅を巻いて、角は境内の神木樺を赤く塗って、「蛇も蚊も」の頭の上に刺す。「蛇も蚊も」の耳は在来種あるいは中国産の枇杷の葉で作られる。目玉はツメタ貝を赤く塗って使用し、舌は菖蒲を赤く塗って使用する(写真2-26)。そこで使われる菖蒲は観賞用のハナショウブとは違うもので、端午の節句の菖蒲湯に使う種類のものである。保存会の方の話によると、「蛇も蚊も」の舌を作る菖蒲の使用は、中国の端午の節句の影響を受けたそうである。菖蒲は魔よけの効果があるため、毎年必ず菖蒲で「蛇も蚊も」の舌を作る。しかし、近年菖蒲の値段が高くて入手困難になり、保存会は毎年菖蒲の入手に悩んでいる。

「蛇も蚊も」の頭の製作には6人が必要であり、縄を横縦に組み合わせて作る。「蛇も蚊も」の頭を作り終ってから、尾を製作する。「蛇も蚊も」の尾のところに剣の形をした木をつけ、ベンガラで塗る。剣は神明神社の神木で赤く塗って剣の形にして「蛇も蚊も」の尾に刺している(写真2-31)。尾に剣が入っていることについては文献『日本書紀』に記載されている。『日本書紀』の「スサノオがヤマタノオロチ退治神話」の最後のところで大蛇を切る時、何か硬い物にあたると感じ、その硬い物を大蛇の尾から引っ張り出してみると、それは剣であったとある。これが後に天皇家の3種の神器として伝わる天叢雲剣である。「蛇も蚊も」を全部作り終わると12時半になる。1時間を休憩して、午後1時半から「蛇も蚊も」を担ぎ始める。

午後1時になると、神明神社の「蛇も蚊も祭り」は神事から始まる。神事では、神主と宮司は2頭の「蛇も蚊も」と祭りの参加者に祓いをする。神事は20分で終わる。神事が終わってから、「蛇も蚊も」の巡行が始まる。5町の氏子たちを2班に分けて(原

西・住宅地・生麦住宅地が1班で、原東・柳町が2班)、それぞれが「蛇も蚊も」を担いで各自の町内を巡行する(写真2-32)。それに先立ち、2頭の「蛇も蚊も」を、神明神社の境内で社殿を中心に3周回す。「蛇も蚊も出たけい、日よりの雨けい、出たけい、出たけい」と掛け声を唱えながら、町内への巡行が始まる。先ず1班の「蛇も蚊も」が鳥居をくぐって、東方向に巡行する。それから2班の「蛇も蚊も」も同じようにして西方向に巡行する。

生麦小学校の3年生は毎年「蛇も蚊も」を担ぐが、頭の方がやや重量があるため、真ん中から尾の方を担ぐ。神主と宮司も2班に分かれて1班ずつ先導して巡行の道路を清める。保存会の役員はその後ろいて各家一軒一軒に人がいるかどうかと、「蛇も蚊も」を玄関に入れてほしいかどうかを確認する。確認してから、「蛇も蚊も」を玄関に入らせる。このように、「蛇も蚊も出たけい、日よりの雨けい、出たけい、出たけい」との掛け声を唱えながら、町内に練り回す。町内の民家やお店に着いたら、「蛇も蚊も」を玄関に入れ、3回以上上に持ち上げて、疫病を祓うとのことである。祓われる家にちょうど人がいたら、今年1年その家の疫病や災いがすでに祓われたということで、「蛇も蚊も」に感謝をする。町内の家を全部回り終わると、午後5時半になる。祭りで掃除や担ぎ手を手伝う小学生の一部は先に帰るが、まだ残っている小学生は学校の先生からご褒美としてお菓子をもらって帰る。

祭りが終わったら、「蛇も蚊も」を神明神社に置く。かつて、翌日に横浜の海に流していたが、現在は、翌朝10時に神社で保存会の人「蛇も蚊も」を燃やす。これで、「蛇も蚊も祭り」が終了する。